

岩倉使節団における山田顕義

-渡正元との邂逅を手がかりに-

大和大学政治経済学部准教授 竹本知行

論点

- ◎山田顕義の欧州体験が彼に与えた影響とは何か
- 徴兵規則の制定者山田顕義が徴兵令延期論を唱えた「山田顕義建白書」の意味とは
- 山田の後半生（司法・教育畑への転向）を方向付けたものとは

方法

- ◎謎に包まれていた山田の欧州での足取り
- ◎『法普戦争史略』と「渡六之助建白書」に見る渡の経緯



明治5年7月16日パリにて撮影（中列右端：渡、同三人目：山田）

渡正元「漫遊日誌」

『法普戦争史略』

- 「仏人の巴里府城に籠る其兵都て七十万及城郭外に配備する大砲都て一千六百五十門、而して其銃砲固より奇巧を極め、其城郭の堅固なる万国無双とも謂つべし。然りと雖も一百三十余日の籠城後、終に其食を尽して出で、和を乞ふに畢りぬ。余之を以て更に知る、故人の所謂兵の勝敗固より人に在つて而して兵器に非ざる事を。嗟又察せずんばある可からざる也」

⇒『山田建白書』：「兵ヲ徴スルヤ、畜ニ容貌ヲ強兵ニ模擬シ隊伍ニ編シ銃砲ヲ採リ敵前ニ進マシムル而已ヲ以テ本務トスヘカラス、人民一般ノ知識敵兵ニ超越スルヲ以テ最要トス」

「渡六之助建白書」

○今其（引用者註：国内分裂の）禍ヲ未然ニ制ス可キモノ他ナシ。朝権ヲ固クスルニ在リ。所謂朝権ナルモノハ、其国体ヲ意シテ、国是ヲ確守シ、紀綱立テ、廟堂固有ノ嚴ヲ修メ、文武ヲ維持シ、官民ヲ統御スルナリ。

○「朝権」：所謂朝権ナルモノハ、其国体ヲ意シテ、国是ヲ確守シ、紀綱立テ、廟堂固有ノ嚴ヲ修メ、文武ヲ維持シ、官民ヲ統御スルナリ

⇒『山田建白書』：「伏願クハ、我朝固有ノ国体ト皇祖天壤無窮ヲ固守シ、国法ヲ定メ欧米諸国ノ国法ト我人民慣習ノ法トヲ斟酌シ、国法ノ条目ヲ審擬シ国法ニ依リ以テ国律ヲ確定シ、普ク人民ニ教示シ、数年ヲ経人民ノ能ク真理ヲ了解スルヲ待チ漸々事実ニ施行センコトヲ」

結論 一渡の経綸と山田の政見-

無原則な急進的欧化政策への批判、国体論を淵源とする「国家と法」・「法と軍隊」の関係性の自覚と強調といった、論の根幹部分において、両者は通底

おわりに -その後の山田-

山田の後半生における業績として、初代司法大臣に就任し様々な法律の起草を行なったことなどはよく知られている。また、明治21年に皇典講究所の所長に就任し、国典の研究を通じて、日本の「国体」の明徴を積極的に推進したことも有名である。あるいは、明治22年に、日本古来の法律と外国の法律の教育・研究機関として、日本大学の前身となる日本法律学校を皇典講究所内に設置したことなどは、日本大学のその後の隆盛と共に山田顕義の名を最も世に知らしめたといえるかもしれない。また、明治23年には同じく皇典講究所内に国学の研究・神職の養成を目的とした、國學院大學の前身である國學院を設置している。

これらの業績と、国体・国法・教育の確立を強く訴えた明治六年の山田顕義『建白書』との連関を考えると、『建白書』は単なる理事官報告書としての意味を超えて、彼の後半生を動機付けたものとして我々に迫ってくる。その意味においても、山田における渡との邂逅の意味は改めて重視されなければなるまい。